C 2　過疎地域における児童の教育・福祉・保健に対する協同体制の確立を目的とした基礎研究(秋田調査第9報)：秋田県T町における住民の生活と意識

大妻女大家政　平井信義・千羽喜代子・長坂陽雄・大場幸夫○松本寿昭

〈目的〉、私たちは過去10年、「児童の生活構造の時代的変遷」と題して、T町を中心に調査研究を行ってきた。本報告は、これまでの成果を踏まえ主題の解明に必要な基礎資料のうち家庭生活を中心とした意識調査から町民の生活実態を把握することを目的とした。

〈方法〉、対象は、T町の世帯（昭和55年3月31日現在2050世帯）を住民票から550世帯抽出し郵送法により実施した。回収は170世帯、回収率は30.9％であった。方法は、質問紙調査法によった。ただし、本報告では、家族の内的状況と考えられる「家族形態と家族意識」、家族の外的状況と考えられる「社会関係」について分析し、考察した。

〈結果〉①家族形態と家族意識、家族の形態では「3世代不完全直系家族」が最も多く、この他に「2世代直系中断家族」や「老夫婦家族」が予想以上に多かった。これは安定した農業収入が得られないこと、そのための出稼ぎを余儀なくしていることなど、今後の家の継承を困難とする諸要因が背景にあるのではないか。また、家族意識については、(i)親子は一緒にくらす、(ii)老病者の世話は長男に、(iii)財産はあととりが相続する、(iv)あととりの人間像は、社会や個人志向よりも家志向である。しかし、あととりの職業に関しては本人次第である。

②社会関係、社会関係を(i)親戚づきあい、(ii)隣り近所とのつきあい、(iii)商店の人とのつきあい、(iv)学校関係の人とのつきあいでみたとき、(i)や(ii)では「用事を頼んだり、金品を貸借りするものが多いが、(iii)や(iv)では「挨拶する程度」の差が多い。以上のことから、町民の意識は全体の傾向として、家中心志向にあるものの、一部に社会や個人にむけた志向が認められる。